

Krull の定理 \implies 選択公理の別証明

alg-d

<http://alg-d.com/math/ac/>

2012 年 10 月 20 日

X を集合, k を体とする. X の元を不定元とする多項式環 $k[X]$ の「係数 1 の単項式全体がなす集合」を M と置く. 任意の $f \in k[X]$ に対して, ある $q_0, \dots, q_n \in k^\times$ と相異なる $m_0, \dots, m_n \in M$ が一意に存在して $f = q_0 m_0 + \dots + q_n m_n$ と書ける. このとき $M_f := \{m_0, \dots, m_n\}$ と書く. また, 部分集合 $A \subset k[X]$ が生成する $k[X]$ のイデアルを \bar{A} で表すことにする. $\bar{A} = \{f_0 m_0 + \dots + f_n m_n \mid n \geq 0, f_i \in k[X], m_i \in A\}$ である.

定義. 部分集合 $A \subset k[X]$ が conservative $\iff \bigcup_{f \in A} M_f \subset A$.

命題 1. イデアル $\mathfrak{a} \subset k[X]$ が conservative

\iff ある部分集合 $N \subset M$ が存在して $\mathfrak{a} = \bar{N}$ と書ける.

証明. (\implies) $N := \bigcup_{f \in \mathfrak{a}} M_f$ と置く. \mathfrak{a} が conservative だから $N \subset \mathfrak{a}$, 従って $\bar{N} \subset \mathfrak{a}$ である.

一方, $f \in \mathfrak{a}$ とすれば $M_f \subset N$ だから $f \in \bar{M}_f \subset \bar{N}$ となる.

(\impliedby) $f \in \bar{N}$ のとき $M_f \subset \bar{N}$ であるから明らか. □

$k[X]$ の conservative なイデアル全体のなす集合を $\text{c-I}(k[X])$ で表すことにする. $\text{c-I}(k[X])$ は包含関係 \subset により順序集合である. 以下, この pdf では「順序」と書いたら常に \subset による順序を表す. $\sigma: \mathcal{P}(M) \rightarrow \text{c-I}(k[X])$ を $\sigma(N) := \bar{N}$ で定める. これは順序を保つ写像である (即ち $N_0 \subset N_1 \implies \sigma(N_0) \subset \sigma(N_1)$ となる). 命題 1 によれば σ は全射である.

$k[X]$ の conservative な素イデアル全体を $\text{c-Spec}(k[X])$ で表すことにする. $X \subset M$ であるから $\mathcal{P}(X) \subset \mathcal{P}(M)$ である. よって制限写像 $\sigma|_{\mathcal{P}(X)}$ を考えることが出来る.

命題 2. 1. $\sigma|_{\mathcal{P}(X)}$ は単射である.

2. $\text{Im}(\sigma|_{\mathcal{P}(X)}) = \text{c-Spec}(k[X])$.
3. $\sigma|_{\mathcal{P}(X)}: \mathcal{P}(X) \rightarrow \text{c-Spec}(k[X])$ は順序同型である .

証明. (1) 明らか .

(2) $Y \subset X$ に対して $\sigma(Y) = \bar{Y}$ は素イデアルである . よって $\text{Im}(\sigma|_{\mathcal{P}(X)}) \subset \text{c-Spec}(k[X])$ である . $\mathfrak{p} \in \text{c-Spec}(k[X])$ とする . $\sigma(X \cap \mathfrak{p}) \subset \sigma(\mathfrak{p}) = \mathfrak{p}$ は明らかである . 逆に , 任意の $f \in \mathfrak{p}$ に対して $f \in \sigma(X \cap \mathfrak{p})$ である .

∴) \mathfrak{p} が conservative だから $M_f \subset \mathfrak{p}$ である .

任意の $m \in M_f$ を取る . ある $x_0, \dots, x_n \in X$ が存在して $m = x_0 \cdots x_n$ と書ける . $m \in M_f \subset \mathfrak{p}$ で , \mathfrak{p} は素イデアルだからある $0 \leq i \leq n$ に対して $x_i \in \mathfrak{p}$ である . よって $x_i \in X \cap \mathfrak{p}$ だから , $m = \frac{m}{x_i} x_i \in \sigma(X \cap \mathfrak{p})$ である . $m \in M_f$ は任意だったから , $f \in \sigma(X \cap \mathfrak{p})$ となる .

よって $\sigma(X \cap \mathfrak{p}) = \mathfrak{p}$ である . 以上より $\text{Im}(\sigma|_{\mathcal{P}(X)}) = \text{c-Spec}(k[X])$.

(3) 2 の証明から分かるように , $\sigma|_{\mathcal{P}(X)}$ の逆写像は $\mathfrak{p} \mapsto X \cap \mathfrak{p}$ である . 故に $Y, Z \in \mathcal{P}(X)$ に対して 「 $Y \subset Z \iff \sigma|_{\mathcal{P}(X)}(Y) \subset \sigma|_{\mathcal{P}(X)}(Z)$ 」 となる . □

定義. X を集合とする .

1. $F \subset \mathcal{P}(X)$ が有限性を持つ
 \iff 「 $Y \in F \iff$ 任意の有限部分集合 $Z \subset Y$ に対して $Z \in F$ 」
2. $\text{Fin}(X) := \{F \subset \mathcal{P}(X) \mid F \text{ は有限性を持つ}\}$
3. $F \in \text{Fin}(X)$ に対して $A(F) := \bigcup_{Y \in F} \bar{Y}$
4. 部分集合 $A \subset k[X]$ に対して $\text{c-Spec}_{cA}(k[X]) := \{\mathfrak{p} \in \text{c-Spec}(k[X]) \mid \mathfrak{p} \subset A\}$

$F \in \text{Fin}(X)$ とすると , $F \subset \mathcal{P}(X)$ であるから $\sigma|_F = \sigma|_{\mathcal{P}(X)}|_F$ を考えることができる .

補題 3. $\text{Im}(\sigma|_F) = \text{c-Spec}_{cA(F)}(k[X])$

証明. 簡単のため , この証明の中だけ 「 $(k[X])$ 」 を略す . 命題 2 で示したように , $\sigma|_{\mathcal{P}(X)}: \mathcal{P}(X) \rightarrow \text{c-Spec}$ は順序同型であった . よって $\mathcal{P}(X) \cap \sigma^{-1}(\text{c-Spec}_{cA(F)}) = F$ を示せば良い . $I_{cA(F)} = I_{cA(F)}(k[X]) := \{a \subset k[X] \mid a \text{ はイデアル , } a \subset A(F)\}$ と置けば

$$\begin{aligned}
\mathcal{P}(X) \cap \sigma^{-1}(\text{c-Spec}_{\subset A(F)}) &= \mathcal{P}(X) \cap \sigma^{-1}(\text{c-Spec} \cap I_{\subset A(F)}) \\
&= \mathcal{P}(X) \cap \sigma^{-1}(\text{c-Spec}) \cap \sigma^{-1}(I_{\subset A(F)}) \\
&= \mathcal{P}(X) \cap \{N \subset M \mid \sigma(N) = \bar{N} \subset A(F)\} \\
&= \{Y \subset X \mid \bar{Y} \subset A(F)\}
\end{aligned}$$

である．故に $\{Y \subset X \mid \bar{Y} \subset A(F)\} = F$ を示せば良い．

$A(F) = \bigcup_{Y \in F} \bar{Y}$ だから \supset は明らか．

$Y \subset X$ が $\bar{Y} \subset A(F)$ を満たすとする．任意の有限部分集合 $Z \subset Y$ に対して $Z \in F$ である．

$\therefore Z \subset Y$ で Z が有限だから $\sum_{z \in Z} z \in \bar{Y} \subset A(F) = \bigcup_{W \in F} \bar{W}$ である．即ちある $W \in F$ が存在して $\sum_{z \in Z} z \in \bar{W}$ となる．このとき明らかに $Z \subset W$ でなければならない． Z は有限集合だったから， F の有限性により $Z \in F$ である．

Z は任意だったから，再び F の有限性により $Y \in F$ である．故に $\{Y \subset X \mid \bar{Y} \subset A(F)\} \subset F$ が分かった． \square

補題 4. $F \subset \mathcal{P}(X)$ は有限性を持つとする． $\mathfrak{a} \in I_{\subset A(F)}(k[X])$ と $f \in \mathfrak{a}$ と $m \in M_f$ に対して $\overline{\{m\}} + \mathfrak{a} \in I_{\subset A(F)}(k[X])$ である．

証明. 任意の $g \in \mathfrak{a}$ を取る．自然数 e を，どの $n \in M_g$ も m^e で割り切れないように取る． $h := m^e f + g \in \mathfrak{a}$ とすれば， $\mathfrak{a} \subset A(F)$ だからある $Y \in F$ が存在して $h \in \bar{Y}$ である． e の取り方から $m^{e+1} \in M_h$ かつ $M_g \subset M_h$ が分かる．補題 3 により \bar{Y} は conservative だから $m^{e+1} \in \bar{Y}$ かつ $M_g \subset \bar{Y}$ である． \bar{Y} は素イデアルだから $m \in \bar{Y}$ となる．故に，任意の $a \in k[X]$ に対して $am + g \in \bar{Y} \subset A(F)$ である．即ち $\overline{\{m\}} + \mathfrak{a} \subset A(F)$ ． \square

補題 5. $F \subset \mathcal{P}(X)$ は有限性を持つとする． $\mathfrak{a} \in I_{\subset A(F)}(k[X])$ とする．このとき $\text{c-I}_{\supset \mathfrak{a}}(k[X]) := \{b \in \text{c-I}(k[X]) \mid b \supset \mathfrak{a}\}$ は最小元 c を持ち， $c \subset A(F)$ を満たす．

証明. $N := \bigcup_{f \in \mathfrak{a}} M_f$ として $c := \bar{N}$ と置く．明らかに $c = \min(\text{c-I}_{\supset \mathfrak{a}}(k[X]))$ である．よって $c \subset A(F)$ を示せば良い．その為に任意の $g \in c$ を取る． c の定義から，ある $m_0, \dots, m_n \in N$ と $\alpha_0, \dots, \alpha_n \in k^\times$ が存在して $g = \alpha_0 m_0 + \dots + \alpha_n m_n$ と書ける． N の定義から，ある $f_0, \dots, f_n \in \mathfrak{a}$ が存在して $m_i \in M_{f_i}$ となる．よって補題 4 を使えば，

$0 \leq i \leq n$ に対して帰納的に $\overline{\{m_i\}} + (\overline{\{m_{i-1}\}} + \cdots + \overline{\{m_0\}} + \alpha) \subset A(F)$ であることが分かる．従って $g \in A(F)$ である． \square

命題 6. $F \subset \mathcal{P}(X)$ は有限性を持つとする．このとき $\text{Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ の極大元は conservative イデアルである．

証明. $\alpha \in \text{Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ を極大元とする．勿論 $\alpha \in \text{I}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ であるから，補題 5 により $\mathfrak{c} := \min \text{c-I}_{\supseteq \alpha}(k[X])$ は存在し， $\mathfrak{c} \subset A(F)$ である． \mathfrak{c} は素イデアルである．

\therefore $fg \in \mathfrak{c}$ とする． $\mathfrak{c} \subset A(F) = \bigcup_{Y \in F} \bar{Y}$ だから，ある $Y \in F$ が存在して $fg \in \bar{Y}$ である． \bar{Y} は素イデアルだから， $f \in \bar{Y}$ または $g \in \bar{Y}$ となる．今， \mathfrak{c} は conservative だから $\bar{Y} \subset \mathfrak{c}$ である．故に $f \in \mathfrak{c}$ または $g \in \mathfrak{c}$ となる．即ち， \mathfrak{c} は素イデアルである．

よって $\alpha \subset \mathfrak{c} \in \text{Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ であるが， α の極大性により $\alpha = \mathfrak{c}$ となる．よって α は conservative である． \square

順序集合 A の極大元全体がなす集合を $\text{m}(A)$ で表すことにする．

命題 7. X を任意の集合， k を任意の体， $F \in \text{Fin}(X)$ とする．このとき全単射 $\text{m}(F) \rightarrow \text{m}(\text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X]))$ が存在する．

証明. 補題 3 により， $\sigma|_F: F \rightarrow \text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ は全単射である． σ は順序同型だったから， $\sigma|_F$ も順序同型であり，よって $\sigma|_{\text{m}(F)}: \text{m}(F) \rightarrow \text{m}(\text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X]))$ は全単射である． \square

$F \in \text{Fin}(X)$ とする． $A(F) = \bigcup_{Y \in F} \bar{Y}$ は素イデアルの和集合であるから， $S := k[X] \setminus A(F)$ は積閉集合である．故に局所化 $k[X]_{A(F)} = S^{-1}k[X]$ を考えることが出来る．良く知られているように，自然な写像 $k[X] \rightarrow k[X]_{A(F)}$ によって順序同型 $\rho: \text{Spec}(k[X]_{A(F)}) \rightarrow \text{Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ が得られる．

命題 8. ρ は全単射 $\text{m}(\text{Spec}(k[X]_{A(F)})) \rightarrow \text{m}(\text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X]))$ を与える．

証明. $\alpha \in \text{m}(\text{Spec}(k[X]_{A(F)}))$ とする． ρ は順序同型だから， $\rho(\alpha)$ は $\text{Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ の極大元である．故に命題 6 により $\rho(\alpha) \in \text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X])$ となる．このとき明らかに $\rho(\alpha) \in \text{m}(\text{c-Spec}_{\mathcal{C}A(F)}(k[X]))$ である． \square

定理. X を任意の集合， k を任意の体， $F \in \text{Fin}(X)$ とするとき，次の条件は同値．

1. F は極大元を持つ .
2. $k[X]_{A(F)}$ は極大イデアルを持つ .

証明. 命題 7 と命題 8 により明らか .

□

定理. Krull の定理 \implies 選択公理

証明. Tukey の補題「有限性を持つ集合は極大元をもつ」は選択公理と同値である (詳しくは Zorn の補題・極大原理を参照) . 故に前定理から明らか .

□

参考文献

- [1] Marcel Ern e, A primrose path from Krull to Zorn, Comment. Math. Univ. Carolin. 36, 1 (1995) 123–126, <http://dml.cz/dmlcz/118738>